

No. 011

2020.06.01



Create

夏号

今まで応援いただき
ありがとうございました！

おとな高校創作部 <http://sousaku.iinaa.net>

少女はアメジスト

遠藤良二

LINEが返ってきたのは約一時間後のこと。

第四章

一

千里さんは何をしていたのだろう。もう夜の八時をまわったというのに。
早速開いてみた。

こんばんは！ 無事退院したよ。一週間後は仕事をしていると思う。いまは、リハビリ中。ところで、答えたくなかったらノーコメントと言ってほしいんだけど、千里さんはどうして腕を骨折したの？

この前話してくれたよね
骨折した理由はね、忘れない出来事だからあんまり言いたくないけど、まあいいや
あたしね、元カレに暴力をふるわれてね、それで

そうLINEを送ったのは僕こと、山岡優、十六歳。相手は大森千里、二十二歳。

そんな……。酷い。

訴えたの？

それは考えてなかった……

なんだか優君の方が大人ね。あたしの方が年上なのに

そういうやりとりを千里さんとした。終わつたかと思つたLINEはまた送られてきた。

二良藤遠『少女はアメジスト』
こんなこと未成年の優君に言っちゃだめかな。今度あたしを抱いてよ。おもちゃにしたいから

僕はそのLINEを見て目を瞠つた。まじか。千里さん、僕をからかっているのではないの

か？ でも、僕も男だし若いしもちろん興味はある。急にどうしたのかな。そういう気分なのか。

今日のリハビリを終え、僕は帰宅した。だいぶ良くなつてきたので自転車で往復した。さっきのLINEの返事をしていない。実は僕には気になる女性がいる。その人とはまだ連絡先すら交換できていない。その人の連絡先が知りたい。でも、それは友だちを介さないと訊けない。

僕はまだ童貞。それも無理はないだろう。だってまだ十六歳だから。でも、同級生の幸は年上の彼氏がいて処女じゃないらしい。まあ、彼氏がいたら処女ではないだろうな。いくつの彼氏かは訊いてないけれど。そのカップルによるのかも。するもしないも。

僕だって彼女は欲しい。その気になる女性とも仲良くなりたい。どうしよう。友達に言ってもらおうかな。でもなあ……。優柔不断な僕。

二

優君が退院して、今日から仕事に行きます、というLINEがきたのが昨日の朝。

がんばってねー！

そう送った。

あたしはアメジストという名前。彼はどういう意味かを調べて言ってくれた。あの時は嬉しかった。

優君は繊細で優しい。女の子にモテるタイプだと思う。そんな彼にあたしは恋をした。暴力を振るわれて別れた彼と大違い。

今、あたしはある男性と一緒にいる。彼は茶髪を真ん中で分けており、顔は目が細く鼻が高い。口はアヒルのように両端がきゅつと上がっ

ている。細身な体で背中には般若のタトゥーが

はんにや

入っている。前に一度抱かれた時、見せてもらった。あたしはそれに見入ってしまい、自分も背中に彫ってもらおうか考えている。彫師も彼に紹介してもらって。身長は高い方だと思う。

彼は誠まことという。ホストをしていて彼の勤め

『少女はアメジスト』 遠藤良二

るお店に行った時知り合った。逆に誠はあたしが務めるソーブランドに来て指名してくれる。なので、お互いの店を行き来している。

今は誠に相談にのってもらっている。繊細でやさしい男・山岡優君のこと。

「んで、そいつはいくつなんだ？」

誠はクチャクチャとビールを飲みながらつまみを食べている。

「十六よ」

誠は驚いた顔をしてこちらを見ている。そして、徐々に表情が緩んできて、

「何だ、ガキじゃねえか。そんなのいいのか」それを聞いたあたしはイラつとした。

「そんな言い方しないで」

「そいつをかばうのか。おれがいるじゃないか」

「あんたはあたしを気持ちよくさせてくれればいいの。お互い様じゃない」

「アメジスト。お前、俺の好きなことは何だか知ってるのか？」

「どうせ、女とやりたいだけでしょ」

「それもある。健全な男だろ！ あとは何だかわかるか？」

あたしはだんだん会話をするのが面倒になつてきた。

「知らないよ！」

「じゃあ、教えてやる。酒とタバコ、それからバクチだ。いいだろ、好きなことがいっぱいあつて」

「そうね！」

あたしはいらいらしてきたので、

「喋らなくていいから早くあたしを抱いて！」

誠は笑っていた。

「この淫乱女め！」

うるっさいなあ！　と、言いながらあたしは全裸になった。

三

あたしを堪能した誠は、ベッドから降り、タバコを吸い始めた。

「あたしにも一本ちょうだい」

「買って来いよな！」

「いいじゃん」

そう言つて強硬突破。誠のタバコを奪い一本抜きとった。床に置いてあるライターを手に取

り、タバコに火をつけた。その瞬間、

「ゴホッゴホッ」

とむせた。

「ほら！　慣れないことするからそうなるんだぞ！」

「うるさい！　最初は皆むせるよ」

「口だけは達者だな。ハハッ」

その笑い方にまたイラつとした。

「笑うな！」

あたしは誠を怒鳴りつけた。彼はまた笑い出した。あたしは怒りが頂点に達しタバコの火を誠の手の甲に押し付けた。

「あっちいいい！　何すんだ、貴様！」

すぐに台所に行き水道の水で冷やしている。知らんぷりしていると誠があたしの目の前

に立ち、ビンタをされた。

「つつ……痛いなあ！ でもこれでおあいこだね」

そう言うと、もう一発平手打ちされた。

「痛っ！ ちよっと！ おあいこだつて言っただじゃん！ 何で叩くのよ！」

「ぶっ殺すぞ、テメエ！ 手がこんなに火傷しちゃまったじゃねえか！ どうしてくれるんだ」

誠はその火傷をみせてくれた。

「あっ……。こんなになるとは思わなかった。

ごめんなさい……」

彼は傷を見せながら、

「病院代よこせ！」

完全に怒らせてしまった、やばい、どうしよう。

「いやあ、痛え……」

あたしは財布のバッグの中身をみた。千円しかない。このお金を渡したらあたしのお金はなくなる。貯金もないし。あたしの職場のソープランドでもらった給料もホストのお店に行つて使ってしまった。

そもそも悪いのは誠のほうだ。あたしが煙草を吸つてむせているところを笑うから。だから病院代なんてあげる必要なんかない。そう思いあたしは黙っていた。

「ただれてるから病院に行つてくる。お前のせいでからな！ 反省しろよ」

誠がそう言ったのを聞いて、あたしは頭にきた。

「なんで、あたしのせいなのよ。そもそもあん

たが煙草吸ってむせているあたしを見て笑ったのが悪いんじゃない」

「は？ 何言ってるんだ、お前は。それくらいで煙草の火を押しつける馬鹿はお前くらいしかいない」

あたしはイライラが募る。言わせとけ、と思
い反論はしなかった。

四

僕はリハビリも順調に進み、すでに出勤している。

数日前に再度、医者に診てもらった時レントゲンもとってもらった。結果は骨もくっついていてもう働いても大丈夫、と言われた。僕は心

底（よかったー）と思った。貢おじさんにもお金借りているから返さないといけないし。これからちゃんと周りを見て、落ち着いて仕事をしよう。同じ目に合わないように。

僕は今、会社の寮にいる。実家がないから。貢おじさんの家もあるが、さすがに療養するのに一週間もいたら迷惑だろう。一応すでに仕事に行っているということを電話しておこう。床の充電器にさしっぱなしにしてあるスマホを手に取り、貢おじさんに電話をかけた。数回、呼び出し音が鳴り繋がった。

『もしもし』

「貢おじさん、こんにちは」

『おお、優』

「もう仕事に行ってるから」

『おっ！　そうか。頑張ってるな！　ただし、無茶はするなよ。お前のことだからわからんかな』

僕は声を出して笑ってしまった。

「これから同じことがないように気を付けるよ」

『当たり前だ』

二良藤遠『ストジメアは少女』
話終わったので電話を切った。その後、風呂に入るため用意をした。今は十五時過ぎ。入れるのは夕方四時以降と決められている。以前、寮に住んでいる従業員の皆さんが余程お風呂に入りたかったのだろう、仕事を休んで昼一時過ぎに自分で風呂釜にお湯を張り、入浴していたのがバレて厳重注意を受けたことがあった。同じ目には合いたくないのでそういうこと

はしないけれど。

明日からまた仕事だ。僕は思っていることを千里さんに伝えてもらおうと思ってテーブルの上にあがっている白いスマホを手を取った。こんにちは！　千里さん。久しぶり。元気かい？

ところで僕気になる女性がいるんだ。千里さんの友達の愛莉さん。

今度、三人で遊ばない？

返信はすぐに来た。

マジで？

この前のあたしのLINE忘れちゃったの？
おもちゃにして良いっていったじゃん！

三人では遊ばないよ。

あたしの気持ちに薄々感づいてるでしょ？

あたしの気持ち？ 千里さんは僕を性欲のはけ口にしたいだけなのかと思っていたが違うのか。もし、違うのなら僕は千里さんにやばいことを言ってしまった。どうしよう……。きつと怒っているだろうな。でも、好きな女性が千里さんの友達だったというだけで、そんなに悪いことかな。

じゃあ、連絡先教えてくれない？

僕はそう送った。でも、送ってから失敗したなと思った。教えてもらえないわけがないと。

そんなの教えるわけじゃないじゃん！ 自分できいてよ。

やっぱりそうきた。本人に訊けと言われても街でバツタリ逢うくらいのレベルだ。それじゃいつになるか分からない。言わなければよかった。今更後悔しても遅い。でも、思い付いたことがある。千里さんと仲良くなつて、愛莉さんに会えるようにしていくというのはどうだろう。それしかないと思う。

わかった。千里さん、今週の土曜日遊ぼう？

もしかして迎えに行かないとダメ？

いや、バスで帰るよ。

なら遊ぶか。

そう言われてよかったと、思った。

もしかして千里さんは僕のことか……。いや

いや、僕みたいなガキを相手にするわけがない。

以前、LINEで送られてきた、あたしをお

もちやにしていよいよ、ていうのは本当だろうか。

もし本当なら思いっきり遊ぶ。と、いうか触り

まくる。そう考えただけでムラムラしてくる。

自分でも悪い男だと思う。でも、今回の話は、

千里さんから言い出したこと。僕は悪くないは

ず。

『少女はアメジスト』遠藤良二

五

今日は仕事。週の始まりだ。

入院中は職場の人は木村さんしか来てくれなかった。それにしたって、支払いの話しだし。

普段、お世話になっっている岡崎誠也さんも然り。いつも偉そうに僕に仕事の指図をしてくる。

世の中の人達は意外と冷たいなあと思った。

八時前には会社に行かなければならない。今

は七時十五分頃。朝飯を食べに行かないと。そ

れにしても眠い。そんな中、ふと両親に会いた

くなった。父は蒸発して突然いなくなったし、

母は実家の小屋で自殺してしまった。せめて、

父にだけでも会いたい。きっと、生きていると

思うから。そんなことを思いながら僕は朝ご飯

を食べに食堂に向かった。

食べ終わって再度自分の部屋に戻るとスマホに着信があった。確認してみると登録されていない番号からだった。一体、誰だろう。掛け直すのは仕事が終わってからにしよう。洗面所で歯を磨き、洗顔を済ませた。部屋に戻ろうと振り返ると、機嫌が悪そうな表情で岡崎さんが頭をかきながらやってきた。彼はいつも朝飯を摂らない。いかつい顔で髪も金色でまるでチンピラのように怖い。僕は挨拶をした。

「おはようございます」

岡崎さんはこちらに一瞥をくれ、

「うすっ」

と、挨拶してくれた。彼と喧嘩したら絶対負けそう。する気もないけど。

以前、岡崎さんの部屋に女性が来ていたことがある。彼の部屋は僕の隣。ある夜、寝ていて声が出たので起きた。何だろう、と思いい耳を潜めていると岡崎さんの部屋からあえぎ声が聞こえてきた。岡崎さん、もしかして彼女とやっている？ そう思い僕は聞こえないように布団に潜った。でも、結構声が大きいので聞こえてくる。たまりかねて僕は自分の部屋を出て、向かいの石井さんという五十代のおじさんの部屋のドアの前に行き、ノックをした。しばらく待っていると、ドアが開いた。石井さんは眠そうに、僕は小声で打ち明けた。明日、班長に言った方がいいぞ、と言われた。今夜は我慢するしかない、という話で終わった。

結局、その夜は眠ることができず朝を迎えた。

その日は終日までブーツとしていた。岡崎さんのせいだ。そんなことがあった。

六

今日の仕事が終わって、へとへとになって部屋に戻った。空模様は雨がしとしと降っていたけれど、とても疲れていたの走ることもせず、ゆっくりトラックから降りて帰ってきた。現場は埃まみれですぐにお風呂に入らないと汚くて部屋でゆつくりできない。なので、朝用意しておいた洗面器の中に洗顔フォーム、ボディソープ、タオル、バスタオルを持って浴場へと向かった。すると既に岡崎さんが陣取っていて体を洗っていた。

「お疲れ様でーす」

声が浴室の中でこだました。

「うーす」

「石井の親父はまだ来ないのか？」

「石井さんの姿はまだ見てないですね」

実は岡崎さんと石井さんは仲が悪い。岡崎さんの彼女のことで石井さんは工場長に逐一、報告したりして岡崎さんが怒られている。まあ、寮の規則を守らない岡崎さんも岡崎さんだが、そんな、いちいち工場長に言わなくてもいいと思う。黙っていれば分からないことなのに。特に女関係のこと。石井さんは五十を過ぎて女と縁がないからヤキモチ焼いているんだと岡崎さんは金髪をかき上げながら湯舟に浸かっている。

「あの親父、早く辞めねえかな、怪我でもして」

その話を聞いて僕は不快になった。もしかして僕が入院した時も腹の中で笑っていたのだろうか。僕は思うことがある。それは人は言わないと伝わらないけど、ある程度思っていることは顔にでるのではないかと。だから岡崎さんが思っていることが少しは石井さんにつたわっているのかな、と思った。まさしく犬猿の仲とは彼らのことを言っているようだ。石井さんは五十代のおじさんだし、岡崎さんは二十歳の若者だから岡崎さんが手を出さなければ暴力沙汰にはならないと思う。手を出す可能性がたかいのはまだ若い岡崎さんのほうだと思うから。からだを洗っている僕は岡崎さんに、

「お先！」

と、声を掛けられた。僕は、

「あ、はい。おつかれさまです」

と、返事をした。岡崎さんのからだはまるで鋼のようだ。仕事が肉体労働だから、いやでも筋肉隆々になる。僕も岡崎さんほどではないけれど、すこしは筋肉がついた。彼はだいたいな部位にタオルもあてずに浴室からでていった。僕はそのあと、湯船につかった。お湯は結構熱めだったので水を足した。十分くらいはいつて上がった。脱衣所からだを拭き、下着と黒いジャージをはいた。それから風呂道具を洗面器に入れ、白いサンダルをはいて自室に戻った。かえり、小雨がパラパラと降っていた。部屋に戻ってから黒色のドライヤーで伸びた髪を乾かした。ふと、今朝電話が来ていたのを思い出し

た。もしかして、いや、そんなわけない。だってスマホの番号は知らないはずだから。僕が思ったのは『父からの連絡』だ。そんなことはいのに、と思いながら電話をかけた。数回呼び出し音が鳴りつながった。

「もしもし、今朝電話をくれていたと思うんですけどどちらさんですか？」

『キミ、優か？』

もしかして、本当に？

「はい、そうですが」

『よかった！ 番号合ってた。俺は優の父だ。キミがちいさいころいなくなつてとてもさみしかっただろ。すまない。あやまってもゆるしてもらえないと思うが優の声が聞きたくて……』

「おとうさん……？ 本当におとうさんなの……？」

『ああ、そうだ』

僕はおさえていた感情がいつきにあふれだした。

「おとうさん！ いままでどこにいたのさ！ 会いたかったんだから！」

怒りが半分、うれしさ半分というところだろうか。

『すまん……』

すこしの沈黙がおとずれたあと、僕は、
「僕の電話番号どうやってしったの？」

『それは貢さんから教えてもらったんだ』

「そうなんだ。貢おじさん、びっくりしてなかった？」

『おどろいてた。どこかでのたれ死んでると思つてみたいで』

『そう思われてもしかたないよね。だって、十年も音沙汰なしだから』

おとうさんはだまっていた。

『優はいまどこにいるんだ？』

「土建会社の寮にいる」

『北海道にいるんだろ？』

「もちろん。実家のあった町から車で一時間くらい走ったところの町にいる」

『いまからあえないか？』

「あえるよ」

『じゃあ、いまから行くから。めしでもごちそうするよ』

「わかった。まってるね」

一向に優君から連絡がこない。今は夕方六時半頃。もう仕事は終わっているはず。いったいなにをしているのかな。あたしのことなど気にも留めていないということかな。そんなのあんまりだ。セフレの野田誠の存在は知られていないはず。

あたしは大森千里。二十一歳。この歳で散々な人生を送っている。高校は親が無職になってしまつて授業料が払えなくなり退学を余儀なくされるし、そのせいで仕事もなかなか見つからず、街を一人で歩いているとイケメンに声をかけられてセフレになっちゃったし。あたし自身セックスは好きだからそれはいいのだけ

『少女はアメジスト』 遠藤良二

ど。風俗で働いているのもそういった行為が好きだからという理由。ほかに好きなことといえば食事、飲酒、タバコ。ろくでもない女だっていうことは自覚している。でも、あたしという人間はこれ以上でもこれ以下でもない。ひとつ言えるのは、人の気持ちがわかる人間じゃないかなと自分で思う。唯一の長所といえるだろう。今までたくさん嫌な目にあつてきたからそのおかげで人の気持ちがわかるようになったのかもしれない。良い方に考えたらこんな感じだと思う。

今、あたしは自宅にいる。しかも独りで。寂しさも悲しさもどこかへ行ってしまった。あたしはいつたいていしてしまったのだろう。気持ちが無だ。こんなこと初めて。それからひと眠

りしてから、自分の気持ちを点検してみると、感情はあるみたい。気持ちが不具合を起こしたのかな。A Iみたいに。それほど出来た頭脳はないけれど。そう思うと笑えてくる。どうやら心は正常に作動している。そう思うと同じくらの寂しさに襲われた。抱かれない。あたしの好きな男に。ようやく、あたしらしくなったかな。彼は今、何をしているのかな。LINEしてみんな。そう思いスマホに打ち込んだ。

こんにちは！ 優君、何してたの？

当然だけど、彼の行動が読めない。だから何処で何をしていることやら。しかし、LINEはすぐに返ってきた。暫く待つことになると思っただけ。

こんにちは。僕はせっかく退院して仕事ができ

ると思ったら体調不良でまた、休養中だよ。何か用ですか？

あら、とたんにあたしは優君のことが心配になった。なので、

いま、どこにいるの？

と、送った。

寮にいるよ

返事はすぐにくる。

心配だからお見舞いに行っていない？

次のLINEがくるまですこし時間がかかった。だめなのかな。

あしたならいいよ。もしかしたら仕事にいけないかもしれないけど。LINEするよ、あしたの朝。今日はこれから父さんがくるのさ

あたしは、そういえば優君の親のはなしはき

いたことなかったな、と思った。あたしも自分の親のはなしはしたことないけれど。

わかった。じゃあ、LINEまってるね

それでやりとりは中断した。

それにしても寮ってどこにあるんだろう。あしたLINEきたとき訊こう。

(つづく……)

小説・エッセイ・ホームページのURL掲載

遠藤良二

みなさん、こんにちは！

ようやく夏号に時期がきましたね。半年に一回の投稿なのでそのあいだは別のサイトに小説を投稿していました。

现阶段の投稿をお知らせしますね！

● カクヨム……様々な性・病と恋愛事情・帰路・目標までの道のり

<https://kakuyomu.jp/users/endoryoji/works>

● アルファポリス……カクヨムと同じ作品を投稿しています。

<https://www.alphapolis.co.jp/author/detail/>

[616577658?sort=update](https://note.com/endo_ryoji)

● note……カクヨムとかぶってる作品はあります。それ以外は、死と出会い・愚者の華・出会い・人生に必要なと思うこと（エッセイ）

https://note.com/endo_ryoji

● 遠藤良二の文章の家（ホームページ）
<https://endoryojishosetsu.wixsite.com/website>

これらのサイトやホームページを見ていただけると嬉しいです。各サイトに感想や意見ももらえるとありがたいです！

No. 011

2020.06.01



おとな高校 創作部 |

検索

<http://sousaku.iinaa.net/>

夏号
今まで応援いただき
ありがとうございました！

no.010 Create 夏号 2020.06.01 公開

おとな高校創作部 <http://sousaku.iinaa.net>